

新聞スポーツ報道の変化について

—サッカー日本女子代表（2015-2019 年）に着目して—

市川紀珠

1. はじめに

2011 年 FIFA 女子ワールドカップドイツ大会優勝という世界一の経験を持つなでしこジャパンが、2015 年に成績下降し始めて以降、なぜ人気を継続させることができなかったのか。日本代表レベルのスポーツの認知や人気拡大において、その競技成績と、メディアの報道のあり方は、重大な影響を及ぼすと考えられる。

2011 年の優勝当時は女子サッカーの認知拡大に貢献したメディアが、成績が下降した時期にはどのように報道していたのかに興味を持ったことが本研究の動機である。

本研究では、実際の新聞報道を史料とし、事実 に即してなでしこジャパンの試合や選手らが 2015 年から 2019 年の成績低迷時期にどのように報道されてきたのかを明らかにすることを目的とする。また、女子サッカーの報道を分析することで、メディアと競技人気には一定の関係性はあるといえるのか、スポーツ報道のあるべき姿を考えるための一助となることを本研究の意義とする。

2. 方法

なでしこジャパンとメディアに関する先行研究には、稲葉(2011)、森田(2012)の2つが挙げられる。これらの先行研究では、2011 年東日本大震災後のなでしこジャパンワールドカップ制覇を報道がどのように捉え、なでしこジャパンを取り巻く物語を作っていたのかを明らかにしている。しかし、いずれの論文もテレビやスポーツ新聞など幅広い媒体を研究対象としており、新聞報道に焦点を当てている研究は見られなかつ

た。また、2011 年以降の成績低迷時期における報道を対象としている研究は見られなかった。

本研究は、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞の 3 紙を対象に史料を収集し、研究を行なった。史料の対象をあえてこのように定めた理由は、最も多くの人々に影響のある主要新聞 3 紙での報道を見ることで、スポーツファンとは限らないマスへの情報の届き方を分析し新たな見解を示すことができると考えたからである。

時期区分については、試合や大会ごとによって、各紙で特徴が見られることが多かったため、章を 1 年ごとに分け、節を大会や試合に応じて区分した。新聞記事をひとつずつ追っていくことで、それぞれの時期に見られる報道の傾向や違いについて検討することを課題とした。

3. 結果

2011 年の優勝メンバーが数多く残っていた 2015 年は、2011 年に活躍し知名度を上げた選手に着目して報道していることが多かった。2015 年のワールドカップ含めて、新聞によって記述が異なることはなく、事実 に即して報道されていた。またワールドカップ前後で、女子サッカーの環境について言及し、現状の課題を指摘し、なでしこジャパンが勝つことで良い方向に向かって欲しいと結論づける記事が多かった。選手からも「優勝することが女子サッカー人気、そして環境改善に繋がる」という趣旨の発言が多く見られた。2011 年の経験を踏まえて、「勝つことが女子サッカーの人気拡大、環境改善に繋がる」と選手、関係者含めて

強く感じていることがわかる言動が多かった。

全体を通じて、試合に負けた場合には、負けた原因を事実に即して分析していることがほとんどだったが、敗因を厳しく指摘しているだけなのか、その上で次に向けての期待や若手の成長に関する記述があるのかは、試合によって、また新聞社によってもその都度差があった。その特徴は2016年のリオオリンピック中の報道で顕著に見られた。朝日新聞が最も厳しく分析していることが多く見られ、毎日新聞がその後に続いていた。読売新聞では、負けた原因を分析しながらも、次に向けた前向きな記述もあった。しかし予選敗退が濃厚となっていくにつれて、読売新聞を含めた3紙で、一体感の欠如やプレーにおける雑さなど、厳しい視点が向けられることが多くなっていた。勝っていた2015年から負け始めた2016年にかけて見られた報道における変化は、このような負けた際の報道の違い、3紙共に日本の女子サッカー環境に着目した記事がほぼなくなったこと、試合に着目した記事や試合で特定の選手に着目した記事が中心となったことの3点だった。

2017年から2018年はワールドカップやオリンピックのような大規模な国際大会がない2年間で、2019年のワールドカップに向けてチームを作っていく期間だった。国際親善試合が主ななでしこジャパンの活動だったが、他2紙と比べて朝日新聞の報道量が減っており、結果報告のみ、あるいは報道なしであることも多かった。また、新聞社によっても報道量にムラがあり、全体として試合結果以外の報道量が減少していた。また、試合結果に付随する記述や、単独の記事でも、特定の選手に着目して言及する報道スタイルが多く見られた。

さらに、2017年の東アジア選手権初戦の阪口夢穂選手と高倉麻子監督の発言を取り

上げた読売新聞と朝日新聞の報道や、2018年のアルガルベ杯の高倉監督の発言を取り上げた同2紙の報道において、同じ試合後の同じ選手や監督の発言でも切り取り方によって読み手の印象が変わってくる記事も見られた。

2019年では、ワールドカップ前、ワールドカップ直後と大会期間中に全体的に報道量が増加していた。特定の選手を取り上げている記事も3紙通じて増加していたが、毎日新聞では、特に詳細に選手のストーリーを取り上げている記事も見られ、3紙で唯一震災と絡めて報道している記事があった。試合や選手の記述に関して3紙を通じて大幅に記述が異なる記述はなかったが、チーム内の体調不良者の発生について報道するタイミングが異なったことにより、3紙それぞれで報道が変わっていた。

4. 考察

以上の結果から、主要3紙として中立の立場であるべき報道が、成績低迷時期に特に批判的な報道を行うことはなかった。しかし、発言の切り取り方や試合分析の表現の仕方によって、記事を一次情報として受け取った読み手が受けるイメージが異なると捉えられる記述の違いはあった。また、より注目されるオリンピックやワールドカップでの報道量が3紙通じて増えており、それ以外の期間では新聞社によって差があった。

新聞におけるスポーツ報道に関して、新聞社によって表現方法や報道量自体に差が見られることがあり、情報源次第でサッカー日本女子代表のイメージが変わったり入手できる情報に差があったりすることが明らかになったといえる。

(指導教員：秋元 忍)